

久 久 比 奴 末

はまゆうと桜貝と

海光るわが故里

第 5 7 号

1 9 9 1 年 1 月 8 日

古老に聴く鶺鴒沼の昔日

編集委員

鶺鴒沼皇大神宮の御祭神天照大神について。

大嘗祭について

吉田興一

鶺鴒 沼 を 語 る 会

古老に聴く鵜沼の昔日

「語る会」編集委員

遠 藤 隆 二

野 口 ゆくえ ほか

草 野 球

東屋の板まえの爺さんの沼田さん（常磐料理、いま壊してしまった。）の長男、野球が好きで、私が青年団の支部長をしているとき、朝早く行っちゃあね、昔は海岸でやったもんです。昭和11年頃は、駅前の商店街とか、寺門さんて歯医者など地元の若い人達のチームもなかなか強かった。それが、夏になると、慶応だ早稲田だと、大勢くるんですよ。本当のピッチャーがみんな入ってる。親善試合したりしたが、凄いですよ。遊行寺の広場へ行って無断で入ってやつていたら、「なぜここを使うんですか。」「私達鵜沼の町内の人間ですから、断らなかったのが悪かったんですが、別に金を出せというわけではないんですよ。」「断って何時迄使うって届けなければ、まずいんですよ。」「それはそうですね。お宅のものですから。」といった具合の時もありました。早稲田や慶応の野球部の一流の人達が、海水浴に来ていましたよ。野球の連中は中屋の貸家へ入ってもらった。入口の階段に「上り下りする者は、童貞であること。」なんて張り紙がしてあった。「私はいけないのか。」って聞いたら、「小父さんはいいんだよ。」他の人はやたらに上り下りしてはいけないという。佐々木信也のお父さんもきていたが、あの人は慶応ですよ。中屋の貸家は八百徳の裏にある家です。後藤（信託会社経営）の息子さんは、慶応にいついて野球が強かったね。

し も ご え

昔は肥料のために、しも肥と小便を担いだ。おやじは、はだして足の裏は石のようにカチカチだった。90歳まで生きていたんだよ。片瀬へは人々が大量にきたから、片瀬の停留所のを貰っていた。あそこは学生が多く来るんだが学生の小便は、肥料としてはききめがない。年寄りの方は栄養が体内に吸収し尽くされないので、小便と一緒に出てしまうので肥料としては上等になる。小便は担ぐと大便より重く、二荷かつぐ。天秤棒の両端に下げ

るとき、縄だと飛沫が飛んで汚れるので、竹の皮を裂いて火で炙って曲げたものを作り、縄の代用とした。江ノ電の枕木は一尺五寸ごとにあるんで、巾が広く線路の上を歩くには困った。小便をこぼすと、罰金を取られた。「ひとりでに底が抜けました」というと、罰金を取られないですむ。底は天秤で突くと簡単に抜けたからね。こえとり橋というのもあった。田舎では小便しても、気付かれないが、一度東京で坂の上で立ち小便をしたら、坂の下の交番まで流れてちゃつて、おまわりに捕まり、「長い坂の上で何をしたのか。」

「抑えきれないので、こぼして仕舞いました。」「家はどこだ。」「私も顔色が悪いでしょう。」「罰金とられるから、顔色が変わってしまった。

縁 ば な

昔の農家は、雨だれが落ち、麦わら屋根には樋がなかったので、「縁ばな」というのがあった。雨だれで泥が内側に跳ねないように、雨だれの落ちる内側に鎌倉石で、低い垣根のように一列に並べてあった。何処の家にもあった。鎌倉石は大谷石より柔らかい。大正時代には金持は、ちょつと茶色い石を鎌倉で掘り出して使っていた。大船の松竹のあったところでは、セメントがとれたよ。

う だ つ

千両箱を持った家が原に一軒あった。「うだつがあがらないよ」とよく言うが、この「うだつ」とはこの千両箱のある家の屋根のてっぺんの両端の瓦のうえに、お餅をつく「せいろ」とよく似た「うだつ」というのを井桁の形に、縦横に二つ重ねてあげておかねばならなかった。明治5年迄それはあがっていたはずなんです。確か浅場という家だったとおもう。浅場という家は、地所を分けあつて鵜沼には沢山あるんですよ。昔の村では、千両箱を持っている家が全然ない村もあり、多いところでは2・3軒あったという。千両箱があればね、あれは規則であげなくてはならなかったんです。

相 撲

鵜沼海岸には東海岸、西海岸、南海岸とあり、私が相撲取った時も3組でた。私一番最後まで残ってね、優勝旗は私が広田弘毅に書いてもらった。広田さんのいる所は南海岸になる。広田さんは昭和11年3月に総理大臣になった人だから、前の路はアスファルトからコンクリートに直した。あの優勝旗には広田さんが、忠勇と墨で書いてくれた。

#

秩父宮さんのこと

麻布の三連隊の中隊長を中尉で秩父宮がやっておられた。大尉になって私のいた主人の家の前をいつも通る。昔の軍隊では、近衛の歩兵と砲兵の連隊のラッパが基本になる。私のところには、よくラッパの音が聞こえてきた。昔は、大臣になると従三位勲一等になった。兵隊は佐官には停止して敬礼しなければならなかったよね。秩父宮さんが静岡の方にいらした時、体をこわし、海岸で松の多いところが体にいいという。結局、鵜沼がいいということで、橋通りに来られたんだが、鵜沼でも一番空気のよいところは、同じ鵜沼でもあそこが一番いいということになった。風もひどくなく、松も多く生えているし、肋膜炎の悪い人には松の木の多い所が病気を治すには最もいいんだということになっている。鵜沼海岸に肺病の病院をもつてこようということもあったが、皆が反対して茅ヶ崎へもつていった。茅ヶ崎の南湖院というんです。

#

福田医院

福田医院はもと軍人の医者で上手だったので、小田急が引けてからは、土地の人より他所から来る人の方が多かった。昭和4年から15年の頃、海岸の駅で下りる人は全部といっていいほど福田さんに通っていた。土地の人はあまり行かなかった。土地の人は、医者には死ぬ時でないと行かないものと思っていた。

#

いま暗渠になってしまった川

旧尼寺（昔の慈教庵）さんところは、引地川から分かれた小川が流れていた。いまはふさいで暗渠になってしまっているが、この小川では、鯉とか鮒がよくとれたし、蟹もいたね。今の雅叙園の処から海の方に流れて、砂浜で池のようになっていた。

#

ほとけ道路

今の本鵜沼の北、大同工業の近くの踏切を北に向かって通る道を”ほとけ道路”といった。踏切事故が多かったからだろう。いま、この道は日本精工の中に入っているが、昔はこの仏道路を通して、南の人達は藤沢の町に入っていたという。

#

鵜沼と鎌倉

鵜沼には東屋という旅館が明治の始め頃からあった。鎌倉は昔の都だけあって偉い人、

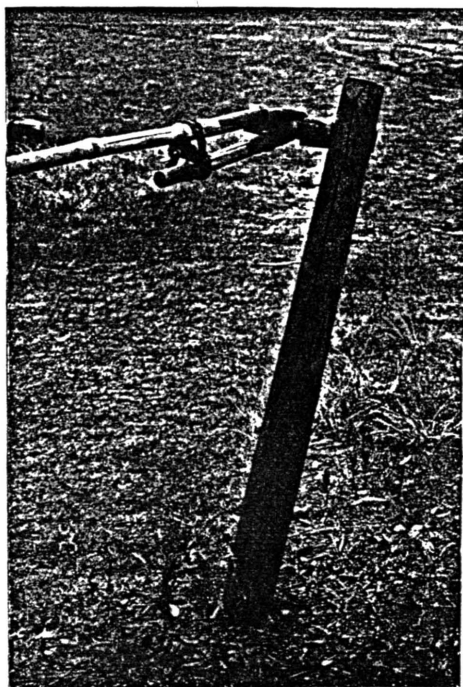
お金持ちはむろんのこと、陸海軍の偉い人は皆鎌倉に別荘を持った。「去年は鎌倉にいたけれど、物価が高くて暮らしにくい、かえって鵠沼の方が自然のままで江ノ島が見え、こちらの方がいい。」と言って鵠沼に来る人が多かったね。私は米を売ってましてね、いろいろと内情がわかるんでね、鎌倉にいた人だというと、必ず金持ちが多かった。今年は鎌倉は物価が高かったから、房州へ行ってきました。という人もあるが、こういう人はダメ。房州はたしかに魚は安くて、いやというほど余っている。。

いわしと肥料

田中ゆう吉さんという人は農家へ肥料を売っていた。昔の農家の肥料というと豆粕と「しこ」。昔はこの海岸では、いわしがよくとれた。あれだけ広い砂浜に、干すところが無いくらいとれた。「ほしか」といって肥料にした。「しこ」はめざしにもするが、いわしは大きくて食べにくく、干して機械でついて粉にし、さつま芋にしても何にしても肥料にした。とても美味しいものができた。それから海の「もく」ね。これが秋になるとうんとあがるんです。

これをとりっこして、干してから、「くるい」（または、くるり）で打って細かくして、これを魚とまぜて使った。おかげで、「たいはく」といって甘くておいしいさつま芋がと

「くるい」または「くるり」の写真



れた。「もく」とは、「かじめ」と

違って細い海草、ぶっぶっと輪のついた葉っぱの細いもの。人間が食べて食べられないことはないが、まず、食べなかった。「ほんだわら」とは違う。この田中さんは高座郡で肥料屋で有名な人だが、藤沢の東海道の真ん中で大きな工場を作った。千葉の九十九里の鰯がとれたとなると、相場が狂っちまう程全部買ってしまう。「ほしか」といって肥料にして売ったのが当たったんだね。農家の人達は「ほしか」ばかりでは金がかかってしょうがないから、鵜沼海岸に沢山あがった「もく」を使った。「もく」の中には、海草だから「わかめ」など混じっていて私などはよくそれをより分けた。「もく」は江の島などでも人が住んでいて、磯や浜にいろんなものをこぼすと、そこに海草が出る。「もく」というものは煮ても食えないんです。たけど、いい肥やしになるんです。「もく」を干して乾かすと火力があがりますね。それを「くるい」で打ってこなごなにしてお、「ほしか」と混ぜて肥やしにした。この辺りの田んぼは、米がみんな食べるくらいは出来たんです。

避暑客と商人

夏に学校が終わると、小田急などで、避暑客あたりが、わーっとくる。この辺の商人の方達は、普段人力車の車屋さんで、夏になると氷屋さんや何かやるわけ。昔は「いちごうあきない」というのがあって、今ののだやさんや城田自転車屋さんの前が「たまり場」で藤沢の商人も来るってちょうどでした。さて、荷物が東京から来るとね、トラックのあとを追いかける。新聞屋や牛乳屋やら、もうみんな落ち着き先まで追っかけていく。着いた処で品物を売りつける取引をしてもらおうとする。いつも「たまり場」を聞きだして、若い人達がそこへ皆来ていた。ただ鵜沼の商人は少なかったね。

半農半漁

堀川に網があって、浜で魚をあげた。網は15人・15人で引っ張った。「よんよう、ふんよう」と掛け声をかけて。魚が上がったとなると、畑仕事していても、畑ほっぽって浜に手伝いに行ったもんだ。半農半漁だもの。夕方「しろ分け」に入る。しかし、畑の沢山ある人は浜なんぞ行かない。

“松露”と“はっ竹”そして“ぼうふ”

海岸では、“はっ竹”と“松露”が、よくとれた。「松露正直ないもんだ。」といって

探したもんだ。慣れないときは、一つも見つからない。しかし、一つ見つけ始めると、生えている場所の見当もついてくるもんで、沢山とれるようになってくる。小さい松の、高さ3・4メートルくらいの若い威勢のいい松の根っこに生えていて、熊手でかいてとる。藤沢には”松露”を買う専門の人がいて、籠一杯とるといくらと買ってくれる。”はつ竹”は、「はつ竹はっものないもんだ。」と言って探した。はつ竹は松茸と同じように傘が開いて、かば色して、背が高くて心棒は長くない。”ぼうふ”は鵜沼海岸から辻堂海岸へかけてよく見かった。吸い物の”みつば”の代わりに使った。この海岸あたりの名物だったよ。おさしみの”つま”としても使った。”ぼうふ”は他所の海岸から流れてきてあがったもので昔は厭っていうほどとれた。親指くらいの太いやつだと、一尺くらい下へずーっとあつて”うど”みたいに美味しい。専門の人がよく見つける。さしみの”つま”には”開いている「ぼうふ」”で、まるで”ぼうふ”の親方みたいなものがよく、匂いがとてもいいんです。”松露”とか”はつ竹”などは、海岸の小さな松から落ちた松葉が重なり、厚くなっていつも湿るってところによくできた。だから、探すのに骨折った。いまは松の木の下も乾ききっていて、生えてこない。

#

一俵10円・お米の値段

大正10年頃では、お米は1俵10円から8円80銭くらいだった。一俵は4斗だから40升だね。1キロが7合で、1升より少ない。今いい米で635円、10キロで6300円する。新潟の米は、1俵でよそより一万円高い。昭和6年頃、一升50銭で2倍になり、暴動が起こった。私は米屋に奉公していたが、昭和7年には、問屋に行くと、1俵8円80銭くらいだったかなぁ。その頃、トラックで50俵積むと戸塚の坂が登れなかった。いまのあの坂は当時より高さが半分になっている。遊行寺坂は、いまの土手の上を通っていた。私が所帯を持って米屋を始めたのが27歳のとき。自転車で横浜の問屋知っているから、買いに行った。その時藤沢では問屋は2軒で田中ゆうきさんと、石原七五三吉さん。横浜、東京は相場下げても、しめさんは下げなかったねえ。自転車で1時間あれば、横浜へ行ってしまうから、横浜公園まで行った。公園では、卵を煙出してゆでていた。10銭で5個あったし、大福なども2銭だったね。その頃藤沢では、麦でも米でも50俵とれると、農家では、大百姓といわれた。ここの農家は皆、3畝(約3アール)から5畝くらいしかないところ

ろに住んでいてね、よそいって借りてこしらえたものだ。だから、いまの稲荷神社から八部までは、ずーっと田圃だったよ。

江ノ電鵠沼駅付近のこと

江ノ電の鵠沼の停留所の近くに山が2つある。丁度、線路で2つにわかれた恰好になるが、百両山という。両方で100円だっていうんだ。100円なら3000や5000坪買うのは訳はない。このあたりに、貴金属商の徳力さんがいた。高瀬弥一さんから買ったので1万坪は有ったろう。川の縁まであった。大正天皇があゝの辺に離宮を造るなんて噂もあった。100円で売ろうということだった。いまの大工の大政さんの上にね、元軍医総監の隈川基という人（藤^沢町長をやつたとかいう）とか、東郷平八郎の娘さんが嫁いでいた田中盛秀って海軍中将もいた。海軍の退役将官が多かったよ。赤星五郎もいた。林百郎もいた。中村寅吉もちょっといたんじゃないか。百両山には、よく遊びに行き兔がいてね、兔は後足が長いから、登るときは速くて捕まえられる。坂下りる時の方が捕まえやすい。斜めに走って下りてくるやつを捕まえたものだ。子どもの兔だね。三越クラブは、そのづーと後だね。赤星五郎は、三井の人でね、昔の八州台のゴルフ場を設計したんだ。一方の鵠沼海岸には別荘がだんだん増え、いまなお、国分さんの屋敷は残っているがもとは左右田さんだし、小田柿さんのあとが松園さんになったし、伊予の松山の久松伯爵のあとは、大橋さん、三井の連中は、たいてい菊本直次郎邸の付近にいた。郷誠之助さんは今の小田急の海岸駅のある一帯の土地を持っていたんだ。今の商店街を真っ直ぐに南東へ行て、突き当たりには内藤さん（当時、松阪屋の持ち主）だ。いろんな人がいてね、当時では世間に名のとあった名士や、大金持ちばかりだった。昔のことは、みんな忘れられてしまうな。

おわり

〔追記〕この記録は、上記、編集委員と運営委員の吉田興一及び副会長の佐藤和子さんの4名が平成2年の4月と5月に、2回にわたり、古老の方から取材したものをもとに纏めたものです。なお、取材させていただいた方のご希望により、匿名といたしました。取材に応じて下さった方々には、厚くお礼もうしあげます。

鵜沼皇大神宮の御祭神天照大神について

吉 田 興 一

趣旨

平成2年（昨年）は平成天皇の御即位の礼が行われ、大嘗祭も皇室行事として無事終了しました。昭和天皇以来62年ぶりだそうで、我々の一生では、もう出会えないお祝い事でしょう。そこで神事としての大嘗祭の解説を付録として、記紀神話以前に形成された日本人を、縄文式文化の晩期まで遡ってみたうえで、アマテラス大神を考察してみました。お読みいただいて遠慮のないご批評を願います。

もくじ

1. アマテラス大神は、天孫降臨の「天っ神」族ではなかった。
2. 「国っ神」と「天っ神」との争い。
3. 縄文時代から弥生時代へかけての神の存在。
4. アマテラスが皇祖神となった時期。

1. アマテラス大神は、天孫降臨の「天っ神」族ではなかった。

アマテラス大神は、天孫降臨の「天っ神」族ではなく、それ以前の太陽神であると考えたい。天孫降臨神話ではタカミムスビの方が重要で、「日本書紀」でもタカミムスビしか出てこない。タカミムスビは、高木大神ともいわれ、高い木の上に降臨する北方アジヤ系の天神であり、アマテラスは南方系の稲作と関係がある縄文期以降の豊穡の女神と推定されるのである。

「古事記」が完成したのは、712年（和銅5年）の1月で、「日本書紀」が完成したのは、720年（養老4年）5月のことである。奈良時代の元明・元正両天皇の代にあたる。733年（天平5年）に出雲国秋鹿（あいか）郡の人、神宅臣全太理（みやけのおみまたり）と国造で意字（おう）郡の郡大領であった出雲臣広島とを編集者として仕上げられた「出雲国風土記」とこの記紀神話とでは、神がみの性格にかなりの差がある。ともかく、記紀神話は高度の政治的、国家的な意図が含まれているという解釈は、現在通説になっている。例えば、神武天皇はともかく、綏靖天皇以下、安寧、懿徳、孝昭、孝安、孝靈、孝元、開化天皇までは、欠史八代とも言われ、崇神天皇が大和統一国家の基礎を築いた天皇としてハツクニシラスメラミコトとよばれている。この称号は神武天皇にもおくられているといわれる。〔注〕神武天皇は古事記では、神倭伊波礼毘古命（かむやまといわれびこのみこと）である。。また、歴史書の年表を開いてみても、3世紀を過ぎてのち、

崇神天皇が最初の天皇として載っている。さて、タカミムスビについては、対馬の厳原町豆酸（つつ）に、いまでも高御魂（たかみむすび）神社がある。思うに、北方大陸から朝鮮半島を経由して渡来した系統の人々の神と推察されるのである。アマテラスは、オオヒルメムチとも称されるが、それ以前に、南方海洋系の人々の信奉する神に近い性格があり、世界的にみて太陽神とか、豊穡の女神とかに擬せられる神でもある。

〔ここで、正当な日本の歴史家というか、いや我々が小・中学校で教育を受けた歴史は、記紀神話を唯一無二の正しい歴史的事実としてきた。学者の主張も同様である。これを疑うことは、不敬罪とされていたのは、戦前とはいうものの、ついこの間のことのように思われ、観念的には我々の体の一部のようになっている。いま、この記紀神話を否定して謎に挑戦しようというのは言論の自由のもとに、いわば、ロマンを追求するといった立場でいる。「記紀神話に矛盾するから、史実ではない。」と断定されては、先に進めない。〕

天孫降臨神話そのものは、稲の収穫祭、新嘗祭の縁起であり、ホノニギの高千穂への降臨は、稲の神霊が高く千々に稔る稲穂の上に降臨することの神話表現なのである。この天孫降臨の指令神をタカミムスビとする伝承が最も多く、アマテラスのみが指令するのは日本書紀の第一の一書だけである。神代史の構想は、三柱の貴子（アマテラス、ツクヨミノミコト、スサノオ）の誕生・アマテラスとスサノオの対立——スサノオの高天原追放——葦原の中つ国の平定、となり、まつ平定の命をうける神は、「記」では、アメノホヒ、アメワカヒコ、タケミカツチとアメノトリフネであり、「紀」本文では、アメノホヒ、オオソビノミクマノウシ、アメワカヒコ、タケミカツチとフツヌシとなっていて、お互いに相違している。古事記では、この後の天孫降臨の模様を、アマテラスとタカミムスビは太子のオシホミミに下るように命じた。ところが、オシホミミは、タカミムスビの娘トヨアキツシヒメとの間にできたホノニギを推薦したので、アマテラスは、「この豊葦原水穂国は汝の治めるべき国である。故に命のままに天降れ」と命じて、アメノコヤネフトダマ、アメノウズメ、イシコリドメ、タマオヤの五柱の神を「五伴緒」（いつとものお）として随従させられた。ということになっている。すなわち、タカミムスビの孫のホノニギが降臨した。アマテラスはオシホミミと常に結びつており、オシホミミに鏡を授け、祭祀を命じたのはアマテラスである。タカミムスビの系列のホノニギの素朴な降臨説話に、「アマテラス、オシホミミ、五部神、神器、神勅という一連の複合的モチーフをもった別系統の説話」が後世に入り込んで、現在の形になったと思われる。どうみてもアマテラスは、よそ者である。タカミムスビは、神祇官の八神殿の主神として宮廷で古くからまつられていた。タカミムスビが本来の生産神、農耕の神として、天皇家の古く稲の播種や収穫のときに祀っていた神であらう。アマテラスに対する天皇の朝夕の礼拝や、十二月の御神楽などは、平安時代の中葉にはじまった。アマテラスを皇祖神としたのは、藤原

不比等（720 年、62歳で没する）であるともいう。また、上田正昭は、雄略朝としている。いろいろの説のなかで、アマテラスはもともと「伊勢にまします神」としているものが多い。この伊勢地方には昔からローカルな太陽崇拝があったらしい。二見ガ浦のしめ縄やグミで作った日像（ひがた）の輪などは太陽のシンボルで、「伊勢にまします神」は漁民の太陽神であり、大和朝廷がアマテラスを取り上げたのは、朝鮮半島から「大陸の日の御子の思想」が朝廷に浸透して、その影響を受け、大王家の祖神としてもつと妥当な神はないかと探し求めた結果とも考えられる。

先の天孫降臨に至る時の前の「中っ国」平定の際、タカミスビとアマテラスとの関係では、アメノオシホミミを下界に遣わそうとしたとき、地上が乱れていたのも、二人の神が相談した話が出てくる。先に書いたことの繰り返しにもなるが、二人は天安河の河原に八百万神を招集し、協議して、アメノホヒノカミを派遣したが、うまくいかず、次にアマワカヒコを「中っ国」に下した。しかし、アマワカヒコは、大国主命の娘のシタテルヒメと結婚してしまう。そこでふたりの神は、雉の鳴女（きじのなきめ）を遣わしたが、逆に射殺されてその矢が高天原まで届いた。タカミスビは、その矢を投げ返すとアメノワカヒコの胸に当たり殺してしまった。神話のこの部分には、突然のように、タカミスビが登場してくる。この神は天地創世の際、高天原に成りませる神として、もともと天上の神であり、アマテラスとは”天上性”においてより純粹である。タカミスビはアメノミナカヌシなどの神とともに、神代巻冒頭で「別天神（ことあまつかみ）」とした。これはアマテラスを「天神」と見立てて、それに対する「別」という意味だそうである。本来天皇家の祖神はタカミスビとされる理由が、ここに隠されているのだとする説が有力なのである。

2. 「国っ神」と「天っ神」の争い

結論から言うと、「国っ神」は葦原の中っ国を構成していた縄文系先住民で、大国主命（国っ神）の国譲りの神話にあるように、高天原族の「天っ神」の勢力に敗北した。このことは、古事記などの神話にもあるとおりである。「国っ神」とか「天っ神」の区分は弥生式文化の後で、生じたものである。そのなかで、「国っ神」の思想の元となるものは、古来、日本列島在来の精霊、神霊だった山、河、海、川、草、木、野、風などの風土に根ざした「神」などである。もちろん、これらの神は、姿をもたない。仏教の「ほとけ」のような偶像は、日本の神がみには存在しないのである。神とは、縄文時代以前から狩猟とか漁撈、焼畑農業などで、生きて来た人々がおそれ、敬うた精霊（スピリット）たちである。一方、「国っ神」と「天っ神」の関係について、記紀神話では、スサノオが高天原から追放されて、「国っ神」となり、出雲のオオクニヌシは、もともと「国っ神」である。

ところが、イザナギ、イザナミの夫婦神から生まれたオオワタツミノカミ（海を司る神）の娘で、ウガヤフキアエズと結婚するタマヨリヒメは、「国っ神」であり、オオヤマツミノカミ（山の神）の娘でニニギノミコトと結婚するコノハナノサクヤヒメは「天っ神」のままだが、この二人から生まれたヒコホホデミはトヨタマヒメと結婚する。このトヨタマヒメは、さきのタマヨリヒメの妹で、姉と同じく「国っ神」なのである。どうもよく判らない。「天っ神」は日本列島の先住民族を征服した側にたち、「国っ神」とは渡来民族の優位性を誇示するための、記紀を編集した大和王朝の創作になるものであろう。「国っ神」である大国主命を祀る出雲大社の神殿の巨大さとか、スサノオを祀る全国の神社の数は沢山ある。有名なものを挙げれば、八坂神社、諏訪神社、熊野神社、氷川神社、熱田神社等で、末社は枚挙にいとまがない。

記紀の出来た紀元8世紀までの、数百年の間には、記紀だけでは明らかにされてない、もろもろの歴史もあるし、勿論、文字もあった。3世紀前後の魏の国が証明するヒミコの弥馬台国は、歴然とした事実であるので、この間の歴史が発掘その他考古学等で明らかになるまでは謎としかいいようがない。

3. 縄文式文化の時代から弥生式文化の時代へかけての神の存在

私達の祖先は、樹木の豊富な緑濃い自然の中で、自然の気象やら山、川、大木などに精霊の宿るのを信じ、共存をはかってきた。それが気象の寒冷化が始まったことにより、森林のなかで、狩猟や木の実、きのこ、山菜等の採集で生きてきた縄文人はやがて焼畑と雑穀の栽培に頼り、自活していくようになった。それがためには、人々が集まり、ある地域に定住して、共同体を作ることが必要となり、やがて、能力の差によって力関係から支配者が出てくる運命になる。日々の糧の保証を神に祈る生活では、呪術師の地位が高まり、最初はそれが支配者の一角を占めるようになる。そして世襲化して恒久的な上下関係が確立し、国作りの原型が出来あがる。その後、縄文晩期から弥生前期（前4から前3世紀）そして中期（前1世紀）と渡来した人々がもたらす稲作農耕がその生産性の高さと安定性で短期間のうちに縄文森林経済社会を衰退させていった。水田、稲作の技術が進み、縄文の頃の石斧は金属製の斧に進化し、森林を伐採し、鉄製の農具が普及し、鉄鉱脈を持つ種族はますます強大になっていく。これは「葦原の中っ国」が次第に「豊葦原瑞穂国」に変わっていくことを意味している。そして、鉄鉱石や砂鉄の産地をもつ、宇佐や出雲等の人々はその恩恵を受け、人口も増え、「くに」を形成していった。最初、「鉄」をもたらしたのは、南方系の海人族であり、ついで、スサノオやオオクニヌシに連なる朝鮮半島経由で鉄を知っている移住集団や、江南地方から移動してきた倭人の祖先の人達であって、先住の海人（あま）族という南方系産鉄族と結ぶことによって「豊葦原瑞穂国」がその全

貌を表してくるのである。縄文時代は約一万年、弥生時代は六百年といわれている。弥生時代は、稲作水田の時代であるから、縄文の精霊は多くの農業神に転向したのである。さらには、狩猟神、漁労神、医薬神などの共同体に関連の深い神も誕生してきた。そして、稲作農耕が、生存の鍵を握ることからして、農耕儀礼が、稲作を支配する神の儀式として形成されたのである。そして、稲作文化の頂点にあるのが、天皇家なのである。

日本列島の先住人のあいだにも、文字は在ったという。北方大陸からの渡来人を通して文字の元となる字が入ってきて、神話も纏まってきた。神話とは、広い地球上の、各地方にさまざまな形態をとって伝えられてきている。日本の神話も、その影響を当然受けざるを得ない。その内容はユーラシア大陸を東西に移動していたスキタイの馬匹飼育遊牧民やのちの騎馬民族のもつ神話がもとになっているのである。記紀神話を編集した人々は、騎馬民族系の神話になじんだ渡来人だったということである。しかし、記紀神話以前に存在していたのが、いふなれば、アマテラスを太陽神とする縄文以来の信仰であり、人類共通の太陽の絶体性である。アマテラスは豊穰の女神であり、その生誕の状況が示すように水神（海神）でもあった。アマテラスが太陽神としてイメージされたのは、太陽と地球上の生物の成育との関係に人類が注目したときにまで遡るとされている。アマテラスの信仰はおそらく縄文中期ころ、インド——アッサム——インドシナ、乃至雲南——江南経由でこの日本列に渡ってきた大女神であったと考えられている。アマテラスという名称は、後世のネーミングである。

4. アマテラスが皇祖神になった時期

もともとアマテラスは皇室の祖神ではない。伊勢神宮の外宮には、トヨウケヒメが祀られている。内宮より先に参拝する風習があるのは、トヨウケヒメ別名ウカノミタマがアマテラス以前の神であったという古代からの記憶があったためともいわれている。縄文人にも厚く信仰されていたアマテラスを、民衆から奪い、皇室の祖神としたのは、いつ、どのような理由と狙いが有ったのであろうか。藤原不比等が、律令体制の貫徹を計ろうと画策して、アマテラスを祖神としたという説もある。その昔から、「天っ神」の主座にあったのは、タカミスズビで、日本列島の征服王朝が持ち込んだタカミスズビ神話は北方騎馬民族の「天」の思想につながるものであつて、天皇家の祖神と推定されるのは、北方系朝鮮半島経由のもたらしたものである。

一応復習してみると、弥生時代中期以降、水田稲作が主流になり、人々はある地方に定着するようになり、狩猟とか山菜や果実の採取、焼畑農業で山野を移動していた縄文人とは全く異なる時代が到来した。人々は定着して農耕するうちに、能力のある者は、次第に人の上に立つようになり身分に格差が生じ、ついには支配者のもとに社会を構成するように

なった。それと平行して、石斧が青銅とか鉄製のものに改良され、収穫が増える一方で、武器として使われ、闘争が起こり、征服者が国を興すことになってゆく。つまり、母系的集団の芋栽培・狩猟民文化から焼畑稲作文化までが、縄文で終わり、弥生時代では、父系的農耕集団の発達はその時代を構成し、ついには、父長権的支配者文化の時代になり、天皇家をもつ国家の誕生に繋がっていく。繰り返しになるが、もともと金属の冶金鍛造の技術者は、弥生時代の朝鮮・中国系の人々の以前に、縄文後期ごろ渡来した南系の人々や、さらに昔の、シベリヤ方面から北回りで主に陸地経由でやってきた人々であると考えられる。アマテラスは、この縄文・弥生の数千年の時の流れのなかで、太陽神（太陽の精霊）として崇拝されてきた実績があり、日本神話でいう八百万神の最高位におかれたのではあるまいか。記紀の完成時期は、国の組織が固まり天皇家の磐石な基礎と信望を固める必要があり、その証左として意図的に、国家生成の神話を、充分な、そしてグローバルな神話の要素を構築の素材にして、完成させたものと考えて間違いない。太陽の女神としてのアマテラス大神を天皇家の祖神と奉り、万古不易の国家の礎を築き、体裁を整えたものであろう。日本書紀には、敏達朝では、宮廷に日記部（ひまつりべ）の設置が記されている。大宮のあった大和の他田（おさだ）には、後世、式内社の他田坐る（おさだにまします）天照御魂神社があり、これは、古い日記部の遺制であるが、ご祭神はアマテラスではなくて、天火明命（アメノホアカリノミコト・別名、天照国照彦天火明櫛玉饒芸速日命、略してニギハヤヒノミコト）である。当時、アマテラスの信仰は、宮廷にはなかったということになる。天皇の伊勢行幸は七世紀後半の持統天皇のときまでは、まったく無かった。確実な記録によるとアマテラスを宮廷でまつたことは、奈良時代まではなかった。延喜式の「のりと」では「伊勢にまします神」として、皇祖神ではなかった。祈年祭（としごいのまつり）と、月次祭（つきなみまつり）の「のりと」に他の大勢の神がみの名のあとに付加的なかたちで「伊勢にまします神」としてのついている。

しかしながら、アマテラスの存在は、太古の昔から、人類が地球上にふりそそぐ太陽を、万物成育の恵みの力を持つものとして、驚異と崇拝を感得し、次第に万物豊穡の女神とあがめるようになったのである。強制されたり、教え込まれたという次元を超越した存在なのである。日本の皇室は、数千年の永い間、連綿として国民の中心にあり、現代では、国家の象徴であり、国民の心がここに収斂される存在である。国民はアマテラスを皇祖とすることに、異存があるわけではない。鵜沼皇大神宮にも、生物の一つとしての人類という存在の対極にある太陽の存在を念頭において、鵜沼の氏神様として見るのがまつとうであらう。

付記

大和朝廷（大和朝廷の成立は、4世紀中頃）の存在する、奈良県大和郷には、三輪、織田、三井、池田、平群郡、三笠山、笠置山、田原、山田、上山田、鳥見山、音羽山、吉野高取山、天の香山、朝倉、加美、大和高田の順で三輪を囲むようにその地名が所在する。その一方で、福岡県甘木市周辺（夜須郡）にも、三輪、小田、三井、池田、平群群、御笠山、笠置山、田原、山田市、上山田、鳥屋山、浮羽町、星野、鷹取山、香山（高山）、朝倉、甘木、加美、筑前高田の順で奈良県と同じように、相対する位置にその地名が所在している。このことから、甘木付近に高天原があって、アマテラスはヒミコであり、高天原が邪馬台国であったという説も存在しているそうである。・・・安本美典「高天原の謎」（講談社）。これが記載されているのは、高木彬光著、「古代天皇の秘密」P. 90・91である。ただし、文庫本。

大和の三輪は現在、大神（おおみわ）神社の拝殿があり、背後の三輪山がご神体となる。山は、オオモノヌシを祀り、オオモノヌシは、よくオオクニヌシと間違えられるが、古事記では、イザナギ、テザナミの国造りより以前にオオクニヌシが国造りしているとき、相棒のスクナヒコナが”とこよ・常世・”の国に行ってしまう。自分一人でどうしたらいいのだろうと悩んでいたとき、海原を照らして現れるのが、オオモノヌシで、三輪山に鎮座することを要求する。日本書紀では、まだこの続きがありますが、ここでは省略します。また、古事記にも出ている話ですが、日本書紀の崇神紀七年に大物主神の祟りとしてオオタタネコの話が出てくる。さらには、崇神紀六年に、崇神天皇が天照大神と地主神である大物主は、これまで朝廷の御殿内に祀っていたが、いずれも神威が強いので、いっしょにいては夜も安心して眠れない。こういって天照大神を三輪山の麓にある笠縫邑に、大物主も三輪山に追い払ってしまった。といったことが載っています。

出典・・・参考にしたのは、次の8冊である。

日本神話	上田正昭著
歴史新書 9、古事記の世界	川副武胤著
日本神話の謎	松前 健著
謎の列島神話	佐治芳彦著
神社の古代史	岡田精司著
日本の神様を知る辞典	阿部正路監修
日本歴史全集 1 および 2、	坂本太郎著（講談社）
世界の歴史全 17 巻（中央公論社）の年表	

おわり

大嘗祭について

平成2年11月22日には今上天皇の御即位の大嘗祭が行われました。平成3年の新年には、丁度よい折なので天孫降臨に表われた大嘗祭の思想についてご参考までに、記載してみます。天孫降臨神話が天皇の即位初めの新嘗祭である大嘗祭と結びついていたということは、多くの学者が論じてきました。新嘗祭は古代の稲の収穫祭であり、神に感謝を捧げるため、新穀で作った神饌を神に供え、また人びとも食する行事であったことは、本居宣長などの説にもあります。大嘗祭は、それを大がかりにしたものであり、大嘗祭には、天皇が大嘗宮という臨時に建てた仮殿（悠紀殿・ゆきでん、と主基殿・すきでん、の二殿からなる）の中の内陣で神をまつり、神膳が供えられるのですが、その神がなんの神であるかは、「大宝令」にも「延喜式」にも記されていません。しかし、この神饌・神酒の材料になる稲の穂を採るために選ばれた、悠紀・主基の二国にある斉田、すなわち、神聖な田のかたわらに、斉場が設けられ、そこに素朴な黒木作り（削らない木）で茅葺ききの仮宮八神殿があり、そこにもタカミムスビがまつられていることを知っておかなければなりません。この八神殿は神祇官の常設の八神殿とはやや祭神も違っているものもあり、このほうは臨時のものであるが、タカミムスビのほかにはミケツカミ、オホミヤノメ、コトシロヌシなどの共通な神もまつられていた。ミケツカミは稲の精霊、ほかの二神は斉女と呪言の神格化である。

この八神殿の中には、それぞれ粗末な竹の柵があり、その上に神のヨリシロとして神木が立てられていたらしい。この神殿の古い形は、おそらく生産の神タカミムスビー神であって、その神のための神木（ヒモロギ）を田のかたわらに立て、その前に稲の穂を供え、祭りを行ったのであろう。これは後世のフォークロア（民間伝承）にみられる。

タカミムスビとは、本来田のかたわらに立てた神木に降臨する田の神なのである。決して遊牧民の天神ではない。

ところで、天孫降臨神話には、この大嘗祭の思想が表れている。ホノニギの名が稲の穂の赤らみ豊かなさまを表すのだと前記・宣長も説明している。タカチホは、斉田の稲穂が高く、千々に稔るさまを表すことはだと、武田祐吉も述べているところである。。つまり、この神話は、稲の神霊が斉田の稲穂に降下するという思想を表すのである。「日本書紀」の一書の二では、タカミムスビが、中臣、忌部の祖神、コヤネとフトダマとにヒモロギを持たせて、皇孫のために祭らせたものだと言っている。古くは、生産の神タカミムスビが人間のために稲霊の神を遣わし、稲の栽培を教え、また神木を立てて己をまつることを教えたという神話なのであろう。後にいろいろな政治的潤色を加えられて、朝鮮の王朝

神話の要素や、伊勢のアマテラスの伝承が加えられて、にぎにぎしい大王の降臨というかたちになったのであろう。

〔注〕 タカミムスビは八神殿の主神として宮廷内に古くからまつられていた。この八神とは、タカミムスビ、カミムスビ、イクムスビ、タルムスビ、タマツメムスビ、ミケツカミ、オホミヤノメ、コトシロヌシで、天皇の寿命の守り神として、鎮魂祭や祈年祭などにもまつられた。このタカミムスビが、皇室の本来の氏神であったとすることは、まず間違いない。

以上は、立命館大学教授、松前 健著「日本神話の謎」P. 104 “大嘗祭”・天孫降臨に表れた大嘗祭の思想・より転記してご紹介した次第である。

#：なお、昨年の大嘗祭に関して、新聞紙上に現れた記事では、宮内庁において「大嘗祭」とは、即位後、天皇陛下が初めて新穀を皇祖および天神地祇に供え、五穀豊穡などを神に感謝し、祈念される儀式。となっている。また、悠紀殿供饌の儀では、秋田県での新穀を主基殿供饌の儀では、大分県の新穀をそれぞれ供えられたということである。

#・・・追記

今回の大嘗歳の執り行われるにあたり、宮内庁は、AP、UPIなどの海外の報道関係にも、よく日本独特の伝統を説明した。しかし、海外のマスコミの目には、「東京の真ん中でミステリアスな儀式が行われる」という驚きが表明されているという。ただし、国学院大学の岡田助教授は論文で、「大嘗祭は天皇が神になる儀式ではない。」と発表したし宮内庁は、「あらひとがみ」という戦前のイメージを否定しようと努力したうえ、とうとう、10月19日のレクチャーでは、海外記者を前にして「天皇が寝具にくるまって神格を得るというのは誤り」と説明するまでに至った。もつとも、日本人にも意味が伝わりにくい大嘗祭だが、海外からはなおのこと好奇の目がそそがれているようだ。

以上は11月23日の新聞の記事より抜粋。

完

「鵠沼」 平成 3 年 1 月 57 号

平成 3 年 1 月 8 日 発行

古老に聴く鵠沼の昔日。

鵠沼皇大神宮の御祭神天照大神

について。大嘗祭について。

発 行 所 鵠沼公民館

藤沢市鵠沼海岸 2-10-34

電話 33-2001

編集鵠沼を語る会 代 表

塩 沢 務

藤沢市鵠沼海岸 3-12-33

電話 36-7876